

最優秀賞

t v k 賞

聞けた、最期の声

神奈川県立平塚中等教育学校

三年 石井千波

「最期はこの家で死にてえなあ。」

それが口癖の様だった祖母は甘い食べ物が好きなお喋り好きな人だった。そんな祖母は昨年、胃癌で亡くなった。闘病といわれると過去の私は病院での生活を想像しただろう。しかし祖母は命が尽きるまで自宅で過ごした。在宅介護には様々な魅力が挙げられるだろう。だが、それには大きな負担が伴う。実際に経験してみても知った在宅介護を考えたい。

昨春、祖母があまり食事を口にしないようになった。家族で暫く様子を見守った。祖母の体調が更に悪くなり始めた夏。私は帰宅後母に「おばあちゃん、癌だった。」と告げられた日のことを今も鮮明に覚えている。これが祖母の闘病生活の始まりだった。

癌と診断されてすぐ、抗がん剤治療が行われた。祖母は高齢だった為、通常の人より少ない薬剤が投与された。それから数日経つと検査の結果も良く医師から「腫瘍が小さくなっていくかもしれない。」と言われた。また元気な姿を見ることができるかもしれないと思うととても嬉しかった。家族皆で喜んだ。

しかし私たちは癌を甘く見ていた。秋になると祖母の容態が変化しだす。あの喜びが幻のようだった。

十月下旬になると、祖母は食べたものを吐き戻すようになった。MRI検査を行うと、胃の出口が閉塞していることが分かった。食事がほとんどなくなってしまった。そこでステントといわれる網目の筒を入れて、胃の穴を広げることに決めた。手術の日、私は学校を休んで祖母に付き添った。母より背の高い私は祖母をおぶってベッドから車へと運んだ。手術終了後、医師から告げられた。

「あと一ヶ月生きられるかどうか分かりません。」

残りをホスピスで過ごすか、家で過ごすか。私たちは祖母のあの口癖を想い、家で死にたいという意志を汲み取ることに決めた。

それからの祖母との日々は体感で一瞬だった。老人ホームで働いていた母は介護休暇をとった。母は毎秒祖母に付きつきりだった。生活が祖母中心へと変わった。

十二月に入ると生活が一変した。連日、訪問看護師が来て水分点滴をした。仕事をしていた母が毎日家にいて、たくさんの知らない人が部屋を出入りする。異様な光景だった。母は

祖母の痩せ細った姿を見て泣くようになった。様々なサービスを利用していると一言でも一人で介護をすることは心身共に限界があった。「死にたい。」と祖母が言い、「死んでくれ。」と母が言う。これの繰り返し。この状況と迫る祖母の死に、私は動揺していた。

祖母が亡くなる前日、祖母は身体を中心に痛みと言った。私たち家族は祖母の身体を撫で続けた。とても辛そうだった。濁った声で痛みと訴え続けた。私は何も出来ず眠りについた。明日も祖母はいると思っていた。その日も母は祖母の様子を見に行っていた。午前三時。祖母の辛そうな声が消えた。落ち着いたんだ、そう思った。違った。祖母は自らの望み通り自分の家のベッドで亡くなった。

在宅介護でなければ母は仕事を続けられた。祖母の痩せ細る姿、痛みに耐える姿、どれも見なくて済んだ。最期に何も出来なかったことを、今になって後悔することもなかったと思う。でも在宅介護だからこそ、祖母の願いを叶えることが出来た。声が聞けた。家族皆で身体を撫でることができた。大好きな祖母とギリギリまで一緒に過ごす。この喜びは病院での闘病では経験できなかったものだ。どちらが良いのか私には判断することができない。それぞれに魅力と負担があるからこそ、多面的に捉えることが大切だろう。在宅介護という選択も決して間違いではない。

今でも私の耳に残る「頑張っておいで。」という祖母の声がそれを示している。